

文雄におけるムとン：「磨光韻鏡」華音の17転19転 ム表記の意味

岡島，昭浩

<https://doi.org/10.15017/2332616>

出版情報：文學研究. 85, pp.21-33, 1988-02-29. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

文雄におけるムトン

——『磨光韻鏡』華音の十七転十九転ム表記の意味——

岡 島 昭 浩

文雄が『磨光韻鏡』に記した字音は韻鏡による演繹的処理が強いと言われる。彼が演繹的処理を施す前の、生の音がどうであったのかということは、呉音漢音に関しては、彼の著書内部から探り出すべき性質のものではない。現在まで伝わる呉音漢音の資料（勿論、文雄当時に呉音漢音と言われていたもの）によって考えるほうがよりよいあり方だからである。そしてその上で彼の施した演繹的処置がいかなるものであったのかをみればよいのである。しかし、彼の記した華音、すなわち唐音の場合には事情が異なる。唐音は当時の生の中国語音であり、文雄当時も日本へ伝来した中国語音は単一の性格を持つものではなかったからである。

華音者俗所謂唐音也。其音多品。今長崎舌人家所學、有官話、杭州、福州、漳州不同。彼邦輿地廣大。四方中国音不齊。

（三音正論¹ 上十一丁）

この様に「品多し」というのであるから、文雄の聞いた華音がどのようなものであったのか、容易には知り得ない。前二載スル者ハ杭州音ナリ、此音大抵韻書ノ規矩ニ叶フ故ニ取テ正音トスルナリ 然リトイヘ凡其音モ亦謬リ 傳ル者間コレアリ 逐一韻書ニ是正ノ國字施ス

（韻鏡指要録²二十九丁オ）

とあり、文雄が杭州音を聞いたことは知れるのだが、「韻書に是正」してあるわけで、杭州音のままの形が記載されているわけではない。寛政十一年刊、泰山蔚の『音韻断』³⁾は上巻中巻に『磨光韻鏡辯正』の内題を持つ書であるが、その中に、

子ガ門ニ遊ベル人嘗テ予ニ謂テ曰 子ハ華音ヲ何人ヨリ傳ヘラレシヤ 文雄ガ如キハ再傳ヲラザレバ譌舛自少カルベシ 岡島冠山ガ著ス所ノ唐語便用唐譯便覧等ニヨリテ考フルニ子ガ論ズル所トも合セズ 亦譌舛ナシト云ベカラズ 予對テ曰 然リ然レドモ其一ヲ知テ其二ヲ知ラズ 韻鏡ハ原譌音ヲ正スガ為ニ作為セルナリ 人若譯官ナドノ呼ブ所ヲ悉ク正音ナリト思ヘルハ甚シキ拘見ナリ 本邦ノ人ノ如キモ悉ク邦語ヲ正ク呼ニハアラズ 中華輿地廣大ナレバーヲ取テ以テ論ズベカラザレドモ韻鏡ニヨリテ華音ヲ學ブトナラバ幾ク華人ノ非トシ譌トシテ斥ル音ナリトモ清濁輕重呼法悉ク韻鏡ニ符号セバ公然トシテ正音ト称スルモ誣トハ云ベカラズ 又奚ゾ親授ヲ貴デ實理ヲ卑ムルコトヲ為ン 深クコレヲ察スベシ

と記しているように、当時の韻学者の考え方は現実の音を「譌」であると捉えて、それを韻鏡によって正すという考え方をもっていたのである。文雄も同様で、『三音正譌』は吳音漢音華音の三音の「譌」を正す書である。

さて、文雄の聞いた中国語音がいかなるものであったのかを知るには、この『三音正譌』が参考になることが多い。『三音正譌』で文雄が譌・俗音とした形が、つまりは現実の形なのである。たとえば、

致質締咨資姿姉恣越次脂旨指至鴟 皆正音ツウイ官音チイ俗音ツウナリ (巻下、九丁オ)

とあれば、杭州がツウで、官音がチイであったことがうかがえ、『磨光韻鏡』に見えるツウイの注音の背景が知れる。

しかしそれが示されていないければ、泰山蔚の弟子が行ったように当時の他の唐音資料と照らし合わせたり、現代中国語諸方言を参考として、それらとどう同じでどう違っているかを、彼の著書内部から探り出さねばならない。

彼の『磨光韻鏡』は、華音すなわち唐音によって韻鏡を解釈したところにおいて、それ以前の韻鏡研究から大きく前進したとされている。彼は韻図の中の一字一字に漢音呉音のほかに華音をも付しているし、そればかりではなく、「有聲無形」(韻鏡指要録十六丁オ)の空巢には華音のみを記すという華音の重視ぶりである。

さて、その『磨光韻鏡』の華音表記だが、舌内韻尾や、喉内韻尾のン表記に対して、唇内韻尾にはムの仮名が当ててある。本居宣長が『漢字三音考』で

今ノ唐音ニテモイサ、カ差別アリテ。又ニ近ク聞ユルト。ムニ近ク聞ユルトガアレバ。古ヘノ音モ差別アリシ也。(皇國字音ノ格)⁽⁴⁾

と記したのもおそらくは文雄の影響下にある。また太田全齋『漢吳音図』の三内韻尾弁別に唐音が参看されているのも、文雄の書を見てのことではないかとの指摘もある。⁽⁵⁾

さて、この『磨光韻鏡』のム表記を、さすがに韻書である、とみる人もある。⁽⁶⁾しかし舌内韻をよく見ると、みなで表記されている中に、真韻と欣韻、つまり十七転の三・四等と十九転に限ってムで表記されているのである。⁽⁷⁾以下、平声の韻目名を以て上去声をも含めて述べる。特に十七転は、一・二等はン表記で、三・四等はム表記という、一見奇異な表記のされ方である。これは『三音正譌』でも同様に記されており、また特に「譌」の記載はない。⁽⁸⁾

一方、呉音漢音においては唇内韻にも舌内韻と同じンがあてられており、なぜ華音にだけムを当てたのかという疑問が生じる。勿論『磨光韻鏡』の性格が華音を中心としたものであるから、呉音漢音にはそれを及ぼせる必要も

意図も文雄にはなかった、と考える事もできる。『日本漢字学史』によると『磨光韻鏡』の呉音漢音は、そのほとんどが『韻鏡易解』を襲っているというが、『韻鏡易解』は多くは呉音漢音の併記ではなく、片方のみ記してあるものである。また、『韻鏡易解』等、文雄以前のものではエウ型をとる二十五転二十六転の三四等を『磨光韻鏡』でヤウ型にしているのは、岡井氏も指摘のとおり、入声借韻によるところもあるが、華音の影響もありそう、文雄の中心で華音と呉音漢音とがどのような関係に合ったのかはなお疑問である。

文雄没後に刊行された『磨光韻鏡字庫』では漢音呉音でも唇内韻には皆ムがあてられている。しかし、舌内韻に目を転じれば華音とは全く異なった原理でンムが使い分けられていることが判る（華音のンムは『磨光韻鏡』と同じ）。『磨光韻鏡字庫』の漢音呉音では十八転・二十転・二十二転・二十四転でムが使われている。『磨光韻鏡字庫』は文雄没後の刊行ゆえ、文雄の意図とは異なるのではないか、というおそれもあるが、これは文雄生前、宝暦四年の『和字大観鈔』¹¹⁾の記述と符合する。すなわち

上にありては。むは開なり。んは合なり。下にありては。變じてんは開となり。むは合となる。しかれば。寒^{カゼ}山先鹽^{サンゼン}などの。音のかなには、開にんの字を用ひ。合にむの字を用ゆべし。 (巻下 んむの字)

というものと共通するのである。つまりムの当てられている諸韻は合口の転であって、これは『男信』¹²⁾で義門が大観鈔ハ無相子也。其同作磨光韻鏡字庫ニ諸ノ撥スル音ノカナ。(ン)(ム)ヲ付ワケタル様。即チ彼開合ニ據レリトミユ。

と指摘しているものである。

『磨光韻鏡字庫』においては（『磨光韻鏡』でも）、唇内韻はすべて合口韻に改訂されているので、唇内韻にはすべてムが当てられるのだが、舌内韻では呉音漢音本来のムン区別と異なってしまっているし、文雄自身の記した華音のムン区別とも全くかけはなれたものになってしまっている。十七転一・二等では華音ム、呉音漢音ン、十八転

は華音ン、呉音漢音ム、という具合である。⁽¹³⁾

『磨光韻鏡字庫』の呉音漢音にあてられたンムの使い分けの原理は、文雄自身が『和字大観鈔』に記したところや、義門の指摘でよからうが、先ほどの疑問、へなぜ華音だけにムを、という疑問を、へなぜ華音にはこのようなムを、と替えて考えねばならない。

三

当時の唐音資料を見ると、多くは舌内韻と唇内韻との区別はしないのだが、天和三年版『黄檗観音経』・貝葉版『金剛般若波羅蜜経』の二資料は唇内韻にムをあてていることが多い。⁽¹⁴⁾

『黄檗版観音経』

侵韻	今金キム甚ジム心深シム音イム	咩ホン
覃韻	貧タム男南ナム闇アム含ハム	
談韻	三サム	擔タン
添韻		念ネン
咸韻	喃ナム	
嚴韻	嚴エム	
凡韻		凡梵ハン

文雄におけるムとン（岡島）

『貝葉版金剛經』

侵韻 甚深心シム金キム今音飲イム 尋ジン臨リン品ピン

覃韻 男南ナム甘カム 庵アン

談韻 敢カム三サム

塩韻 検ケム陰ヘム瞻チエム

添韻 念ネム

咸韻 咸ヘン巖エン

凡韻 梵ハン

勿論、舌内韻・喉内韻にはンしか当てられおらず、唇内韻と舌内韻との区別のある中国語方言音が江戸時代にも日本に伝来して仮名に転写されていたわけで、近世唐音の中に、唇内韻と舌内韻の区別のあるものを認めるべきなのである。そうすると文雄が聞いた中国語音の生の音でも、唇内韻と舌内韻とに区別が存し、文雄はそれを聞いて『磨光韻鏡』に付音した華音の材料としたのではないかとの見方も考えられる。しかし、そうすると十七転・十九転が、なぜムで表記されたのかということの説明せねばならなくなってくる。

四

現在でも唇内韻と舌内韻を区別する方言は中国各地にいくらもある。『漢語方音字匯』¹⁵の調査地点の中、梅県・広

州・厦門・潮州の四地点、高本漢『中国音韻学研究』の方言字彙では、高麗、安南の他、広州・客家・汕頭がそれである。これらは唇内韻出自のものm、舌内韻出自のものnとなるのだが、朝鮮漢字音・越南漢字音を除いて、唇内韻出自のものでも、頭子音が唇音のものはみなnで発音される。これは異化現象であると説明されるが、歴史的には『中原音韻』にもみえる現象であり、『漢語方音字匯』や『中国音韻学研究』に見えない方言でも多くはこのような異化現象を起こしてると思われる。先述の黄檗唐音資料二種の凡梵品がムでなくンで表記されているのもこうした現象の反映であると考えられる。

またこれらmnの区別を有する現代中国語諸方言では舌内韻出自のものの一部にmで発音されているものもある。『漢語方音字匯』によれば、梅県では刃・慎・蟬、広州で蟬、厦門で刃・忍・欣、潮州で刃・忍・慎・蟬、の韻尾がそれぞれmで発音されている。『中国音韻学研究』でも蟬禪が広州・客家で、忍刃が汕頭で、mに発音されるといふ。厦門音では「蟬」はnおわりだが、これは羅常培『厦門音系』でも同様で、同書によるとmおわりは、刃・忍・欣・焮・疾で、厦韻はいずれもㄇである。一般的傾向として韻腹が狭いもの、そして頭子音が摩擦音であるもの一部が、唇内韻化しているようである。

これら舌内韻出自でmに発音されるものうち刃・忍・慎は韻鏡の十七転三等、欣・焮・疾は十九転、蟬は二十三転に存する。蟬は例外となるが、他の四字は皆韻鏡の代表字であり、韻鏡の代表字に限ってみるとmで発音されるものは韻鏡で十七転・十九転、真韻と欣韻とに限られるのである。

先述の近世黄檗唐音資料では舌内韻出自でム表記されるものはないが、文雄の聞いた唐音がこれら諸方言と同じ状況であったとすれば、『磨光韻鏡』の十七転・十九転の華音ム表記のあり方が説明可能になる。

『磨光韻鏡』には、普通の韻鏡にはみえない「合口呼」「撮口呼」などというものが書かれている。これは韻鏡のその転がすべておなじ「呼」であれば、「内転第一合」などと書かれた欄に記入されるが、等毎に「呼」が異なる場合には普通の韻鏡では韻目が書かれるところに記される。また、止撰開口のように頭子音によって異なる場合には上部に記される。この「呼」が「字彙」巻末の『韻法直図』『韻法横図』によるものであることは、

且以杭州音律之廻韻鏡近乎 是呼法直横二図委曲焉

(韻鏡索隱十丁ウ)

とあることから知れる。

『等韻源流』⁽¹⁶⁾によると「開齊合撮」という用語が見えるのは「字彙」が最初であるという。文雄はこれを「華音のため」の呼法であると考えたらしく

華音ニハ開合ヲ細分ノ種種ノ呼法某某ノ呼ヒロヲナス「前刻ニ委曲セルカ如シ。和ノ吳音漢音ハ止開合ノ二ツ

ヲ論メ止ムヘシ

(韻鏡指要録十九丁ウ)

明人論呼法、字彙直横二圖備矣。若夫欲學華音者、當由直横二圖呼法也。

(韻鏡索隱十七丁ウ)

としている。文雄はこの「字彙直横二図」の呼法と華音の符号に自信をもったらしく、

齊齒、開口、撮口、閉口、捲舌、咬齒等之呼法、不學華音、則能辯之。

(韻鏡索隱七丁オウウ)

とまで記している。

さて、『磨光韻鏡』の三十八転から四十一転までの唇内韻では、三十八転と四十一転が「閉口」、三十九転四十転の一三四等が「閉口」、同じく二等が「齊齒捲舌而閉」とある。問題の十七転一二等と十九転には「齊齒呼而旋閉口」

と記してある。ここ以外の舌内韻には「閉口」は見えない。十七転一二等は「開口」、十八転は一等が「合口」、二三四等が「撮口」、二十転は唇音が「合口」、牙喉音が「撮口」、二十一転は「齊齒捲舌呼」、二十二転の二等は「合口」、三四等が「撮口」、二十三転は一等が「開口」、二等「牙音齊齒余音開口」、三四等「齊齒」、二十四転の一二等「合口」、三四等「撮口」となる。以上は舒声で、入声は問題の十七転、十九転以外は舒声と等しい。十七転の入声は一二等三四等ともに「齊齒」、十九転は「齊齒呼而啓口」とある。

さて、問題の「齊齒呼而閉口」は『直図』で、京韻九、巾韻十、金韻十一とあって、金韻の箇所に

京中三韻。似出一音。而潜味之。京中齊齒呼。金閉口呼。京齊齒而啓唇呼。巾齊齒呼施閉口。微有別耳。

とある、それである。¹⁷「横図」では巾の列は「齊齒」としか記されておらず、かえって金の列に「音悉同上列但旋閉口」(「上列」は巾の列)と見える。文雄はここでは『横図』ではなく、『直図』によつたと見えよう。ところでこの「旋」字は、河野通清『字彙卷末衡直韻圖解』では「旋閉口者旋疾也」としているが、文雄は『磨光韻鏡餘論』で「ヤ、」と傍訓を付している(中卷三十六丁ウ)。

『直図』の作者が何故ここに「閉口」と記したのかは不明であるが、南方音では「京」等の梗摂字はりではなく¹⁸ nおわりになつていたと思われるので、「巾」等と区別しにくくなつていたことと関係があるのだろうか。中国側の理由はともかく、文雄はこの巾韻に「旋閉口」と記されているものを読み、それを韻鏡上に記したのである。

六

文雄の聞いた華音が、先述の厦門音や閩南音と同じであったとすれば、唇内韻に関しても頭子音が唇音である場合はnになるし、真韻欣音に関しても例外が存し、mで発音されるものとnで発音されるもの(文雄にとってはム

に聞こえるものとんに聞こえるもの)が混じっていたわけである。それに比して他の舌内韻はすべてnで発音され(ンに聞こえ)る。そしてこの別れ方が『字彙』韻図に「閉口」とある韻でムに聞こえるものがあり、それ以外の韻ではすべてンに聞こえるというみごとな対応を示した。

この華音と『字彙』の韻図との対応は、文雄に華音の韻鏡研究に役立つことへの自信を深めさせたと思われる。

直図京巾金三韻似出一音云云微有別耳 以和音何辯……不学華音則孰能辯之

(韻鏡指要祿七丁オ)

「京」は呉音でキヤウ漢音でケイとなり、巾金のキンとは似ていない。「京」をキンと読む華音こそ大事だというのがこの眼目だろうが、先述のとおり、京が巾に近付いていた南方音では、巾韻(つまり韻鏡上では真韻・欣韻)に見られるmおわりの字が京韻との重要な差違になっていたことと関連する記述ではあるまいか。やはり「閉口呼」とあればmおわりである(ムに聞こえる)、ということに文雄が益々の自信を深めたことによる記述であるように見えるのである。

ここで文雄は、「閉口」という記述のある唇内韻及び真韻欣韻と、他の舌内韻・喉内韻とを華音においては区別すべきものと考え、ここに演繹的处理を施した。つまり、その韻のいくらかの字にでもmで発音される(ムに聞こえる)ものがあり、『字彙』の韻法直図に「閉口」という記述のある唇内韻及び真韻欣韻はすべてム表記されることになったのである。

すべてがム表記されることになったのは、へさすがに韻書ということになろうが、その背後には、原則として唇内韻と舌内韻とを発音し分けている中国語の方言が江戸時代に我が国に伝わり、それを彼が聞いていた可能性が非常に高いということを忘れてはなるまい。

これに対して、華音の裏づけなしに「閉口呼」という『字彙』の用語のみから、このム表記を文雄が行ったという考え方が提出されるかもしれないが、それは取るまい。「閉口」などの呼法を知るには華音を学ばなければならな

い、と記している文雄の態度、または『三音正譌』に譌音の指摘がないこと等から、「閉口音」ではムが聞かれるという対応があつたものと考へたい。

七

『歴光韻鏡字庫』に見える呉音漢音のンムの使い分けの原理も、実は文雄としては華音の原理を応用したつもりだつたとも考へられる。先にも引用した「華音ニハ開合ヲ細分ノ種種ノ呼法某某ノ呼ヒ口ヲナス……和ノ呉音漢音ハ止開合ノ二ツヲ論メ止ムヘシ」の条からも分かるように、文雄は『字彙』の呼法を、へ開合を細分したもの、と考へていた。後に泰山蔚が『音韻断』の中で、文雄が三十八転を合口に作ることを批判して

第三十八転註閉口呼一本作開非矣止 コノ転ヨリ四十一転ニ至マデ舊本共ニ開トス 此ニコレヲ改ムルモノハ何ニ據コトヲ詳ニセズ 註意ヲ按ニ蓋閉口呼ナルヲ以テナラン 文雄閉口ヲ以テ合口ノ類トシ 合口即合転ト以爲ハ粗ナリ

(上十三丁ウ)

と記したように、文雄は華音の閉口呼は呉音漢音の合口呼に対応すると考へたのであろう。しかしそうなると、泰山蔚も指摘しているように、

若閉口果シテ合転トスベクンバ 第十七転第十九転ノ齊齒而旋閉口ト云ガ如キ 亦合転ニ属ベキヤ

(上、十四丁オ)

ということになるのだが、文雄は華音の呼法と呉音漢音の開合の一致にさほど気を使っていなかつたのであろうか。つまり、華音と呉音漢音とが似た形にならなくともよいと考へたのであろうか。そのところは疑問である。前にも述べたように、文雄における華音と呉音漢音との関係——華音によって韻鏡を研究した文雄がその成果によって

吳音漢音をどのように改訂したのか——は今後考えていくべき問題である。

註

- (1) 宝暦二年刊。九州大学付属図書館蔵本による。
- (2) 以下、『磨光韻鏡』、『韻鏡素隱』、『韻鏡指要録』、『磨光韻鏡字庫』、『磨光韻鏡余論』はすべて勉誠社文庫による。
- (3) 国文学研究資料館蔵マイクロフィルム(学習院大学国語国文学研究室蔵本)紙焼による。本書は岡井慎吾氏『日本漢字学史』九五、磨光韻鏡及び其の同系の諸註、三五九頁では、『聲韻断』と記され、『磨光韻鏡』とは反対の立場に立てるものとしている(三五六頁)が、『磨光韻鏡』の強い影響下にあるものであることに違いはない。
- (4) 『本居宣長全集』第五卷、四〇四頁。
- (5) 湯沢質幸氏『唐音の研究』四二〇頁。
- (6) 中田喜勝氏「南山俗語考の音韻について」中国文学論集(九州大学)一号。
- (7) 湯沢氏前掲書四二〇頁では、「ムは臻撰開口のみ」と記す。
- (8) 十七転には舒声の記載はなく、十九転に「勤^{キム}勉^{キム}芹^{キム}近^{キム} 官話キム」とある。
- (9) 九五、磨光韻鏡及び其の同系の諸註、三五二頁。
- (10) 元禄五年刊。積盛典。九州大学付属図書館蔵本による。また『新增韻鏡易解大全』(享保三年刊)も、マイクロフィルム版静嘉堂文庫所蔵国語学資料集成によってみたが、付音に差はない。
- (11) 九州大学付属図書館蔵本による。
- (12) 国語学大系第四卷(新版第三卷)、二〇一頁。
- (13) 『磨光韻鏡字庫』の韻尾を表にして示すと次の通りである。

		十七開	十七開	十八合	十九開	二十合	二十一開	二十二合	二十三開	二四合	三八合	三九合	四十合	四一合
吳漢音	ン	ン	ム	ン	ム	ン	ン	ム	ン	ム	ム	ム	ム	ム
華音	ン	ム	ン	ム	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ム	ム	ム	ム

(14) 拙稿「近世唐音の重層性」語文研究六三参照。またこの内『黄檗觀音経』については、奥村三雄氏「天和三年黄檗版觀音経―近

世初期の表記・音韻資料として―」近代語研究第三集、「日本漢字音の体系」訓点語と訓点資料第六号、「近世音韻史料としての黄檗唐音」岐阜大学文学部研究報告（人文科学）五号、等参照。

(15) 北京大学中国語言文学系語言学教研室編。

(16) 趙想之（蔭棠）氏著。文史哲出版社再版本では一六一頁。

(17) 『字彙』の韻法図は、享保十八年刊、河野通清『字彙卷末衡直韻圖解』（九州大学付属図書館蔵本による）、及び『字彙』清刻本（九州大学付属図書館蔵本）によった。『字彙』の和刻本では、「閉」を「開」に誤刻しているものがある。たとえば「横図」の「平二」の「兼」列は、汲古書院『和刻本辞書字典集成』所収の寛文十一年刊本を始め、みな「開口」「旋開口」に作っている。

(18) 奥村三雄氏「撥音シの性格―表記と音価の問題―」国語学二十三号、有坂秀世氏「諷経の唐音に反映した鎌倉時代の音韻状態」『国語音韻史の研究』等参照。なお、李新魁氏『漢語等韻学』第八章第二節「韻法直図」一系的等韻図は『韻法直図』の背景にある音のm n 区別の有無について論じている。